自己表現尺度の作成および信頼性と妥当性の検討

内 山 有 美

四国大学生生活科学部児童学科

問題と目的

自己表現を用いた他者との関わり方として、平木（1993）はアサーティブな自己表現、攻撃的自己表現、非主張的自己表現を挙げている。アサーティブな表現は自分の気持ちや考えが率直に、その場にふさわしい方法で表現されるものであり、自分も相手も大切にしたい自己表現とされる。攻撃的表現は他者の気持ちや考えは軽視し、自分の気持ちや考えを表現するものであり、自分を優先させて他者を犠牲にした自己表現とされる。非主張的表現は自分の気持ちや考えを十分に表現しないものであり、自分を犠牲にして他者を優先させた自己表現とされる。ほかにも Alberti & Emmons (2001) や Deluty (1979) でも同様に、自己表現は3つの表現スタイルで捉えられることが多い。しかし、場面への反応として得られた自由記述データを表現方法によって分類した安藤（2009）によると、自分の主張を間接的に他者に伝えようとする間接的表現が、攻撃的表現よりも高い割合でみられているように、間接的表現は他の表現と同様に重要であり、日常場面でもよく使用される表現スタイルと考えられる。したがって、自己表現には3つの表現スタイルに加えて間接的表現を含んだ概念で捉える必要があるだろう。そこで本研究は、いずれかの表現スタイルに相当する表現方法に関わる項目を集め、自己表現全体としてどのような表現方法がみられるかを明らかにする。そして、日常生活全般を通じて行われる自己表現として、個人の表現方法の選好を測定する尺度を作成することを目的とする。

尺度作成にあたり、尺度の信頼性と妥当性についても検討を行う。尺度の信頼性はCronbachの α 係数による内的一貫性を調べる。また、先行研究から関連が予測される変数を用いて、表現方法についての妥当性を検討する。用いる変数はシャイネス、攻撃性、アサーションを採用する。先行研究においてシャイネスは言語による表出スキルとしての社会的表出性との高い負の相関が確認されており（相川, 1991）、非主張的表現、間接的表現に相当する表現方法との正の相関が予測される。攻撃性はアサーティブ表現と負の相関を、攻撃的表現とは正の相関が確認されており（Galassi & Galassi, 1975）、両者に相当する表現方法との関連が予測される。アサーションは玉瀬・越智・才能・石川（2001）の結果から、アサーティブ表現、攻撃的表現に相当する表現方法との正の相関を示し、非主張的表現、間接的表現に相当する表現方法とは負の相関を示すことが予測される。

方 法

自己表現尺度の作成 国内外で開発された自己表現に関する尺度項目を参考にして、表現方法を示す101項目を作成した。その後、心理系大学院生5名に項目が表現方法の特徴として妥当であるかの3段階評定を依頼し、全体平均値に満たない項目は削除した。さらに、著者により同一内容の項目削除や理解しやすい内容への修正を行い、最終的に49項目を作成した。回答は自分の自己表現として“全くあてはまらない（1）”から“よくあてはまる（5）”の5件法で評定を求めた。

手続きと調査内容 大学生186名（男性97名、女性83名、不明6名、平均年齢19.74歳、 $SD=1.56$ ）を対象に、授業内にて一斉調査を実施した。調査は自己表現尺度と、シャイネス（16項目5件法：相川, 1991）、攻撃性（11項目5件法：安藤他, 1999）、アサーション（16項目5件法：玉瀬他, 2001）を用いて調査を実施した。すべての変数の得点は、各尺度に含まれる項目の合計値を用いた。

結 果

因子構造の検討 自己表現尺度に対し、最尤法・promax回転による因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況が8.702, 5.410, 3.250, 2.705, 1.736との推移を示したため4因子解を採用した。また、単独の因子に.40以上の負荷量を示すことを基準とし、再度、因子分析を行った結果、最終的に計25項目を採用した（Table 1）。そして、項目内容から第1因子を「間接的表現」、第2因子を「アサーティブ表現」、第3因子を「非主張的表現」、第4因子を「攻撃的表現」と命名した。

信頼性と妥当性の検討 α 係数を算出したところ、「間接的表現」は.82、「アサーティブ表現」は.77、「非主張的表現」は.80、「攻撃的表現」は.73を示した。次に、変数間の相関係数を算出した（Table 2）。その結果、予測通りシャイネスと「非主張的表現」、「間接的表現」との間の相関、攻撃性と「アサーティブ表現」、「攻撃的表現」との間の相関、アサーションとすべての因子との間の相関が示された。その他の関連は変数の特性上、想定されるものであったが、予測に反する関連として「間接的表現」と攻撃性との間に正の相関がみられた。

Table 1 自己表現尺度の因子分析の結果および平均値と標準偏差

項目	F1	F2	F3	F4	M	SD
F1. 間接的表現 ($\alpha=.82$)						
13 言いたいことは曖昧な表現で伝える	.81	.08	.01	.08	2.97	1.14
41 曖昧な表現をよく使う	.79	.09	.02	.11	3.20	1.09
21 遠まわしな表現をよく使う	.77	.14	-.02	-.03	3.18	1.11
36 友達からの頼み事には曖昧な表現で断る	.57	-.06	-.04	.25	2.85	0.99
27 自分の考えをストレートに表現しない	.49	.07	.12	-.33	3.15	1.07
45 自分の意見はストレートに表現しない	.49	-.12	.07	-.25	3.02	1.04
F2. アサーティブ表現 ($\alpha=.77$)						
22 互いの意見を尊重する	-.09	.68	.14	-.10	3.92	0.81
20 言いたい事を言うときには、友達の話もよく聞くよう心がける	-.04	.67	.05	-.10	3.89	0.86
30 自分の意見だけでなく、友達の見解についても理解しようとする	.07	.65	.04	-.10	4.02	0.76
9 自分の意見も友達の見解も尊重する	-.07	.55	-.09	-.10	3.89	0.87
46 意見が異なる場合は十分話し合う	-.01	.55	.04	.18	3.70	0.91
25 言いたいことを言うときにはその影響も考える	.31	.54	-.03	.06	3.63	1.07
34 自分と友達の見解が合わないとき、お互いの納得が得られるような新たなアイデアを提案する	.23	.50	-.19	.20	3.46	0.99
F3. 非主張的表現 ($\alpha=.80$)						
8 無理なお願いでも断れない	-.02	-.04	.78	.14	2.87	1.09
15 自分が忙しいときに用事を頼まれても断れない	-.07	-.20	.68	-.11	2.77	1.11
26 友達からの頼み事は断りにくい	.11	.11	.68	.05	3.48	1.01
49 自分が忙しくても友達の要求には応える	-.02	.09	.63	.07	3.16	0.87
23 自分より友達の考えを優先する	.03	.15	.50	-.12	3.19	0.88
33 「イヤだ」と言うのが難しいときがある	.28	-.13	.44	-.06	3.56	1.10
F4. 攻撃的表現 ($\alpha=.73$)						
32 思ったままに表現する	-.09	.16	.10	.70	3.20	1.09
14 話し合いでは友達の見解を聞かずに自分の意見を押し通す	.24	-.36	.08	.58	2.30	1.11
44 発言するときは、思ったままを率直に表現する	-.35	.12	.15	.57	3.01	1.01
37 友達が何と言おうと自分の意見を言い切る	.12	-.14	.00	.53	2.40	0.87
42 自分の意見は大きな声で主張する	-.17	.11	-.04	.49	2.89	0.88
35 友達を傷つけてもありのままの自分の言葉で表現したい	.20	-.04	-.11	.47	2.41	1.10
因子間相関						
F1	—	-.17	.39	-.34		
F2		—	.16	-.04		
F3			—	-.32		
F4				—		

考 察

本研究の結果、自己表現尺度は25項目4因子構造であり、 α 係数は.73-.82と十分な内的一貫性が示された。これにより、従来の3つの表現スタイルに相当する表現方法に加え、「間接的表現」が確認された。また、弱い相関ではあるが、「間接的表現」と攻撃性には関連があることから、「間接的表現」に潜む攻撃性が示唆された。これに関して、攻撃性を隠した間接的な攻撃的表現 (Phelps & Austin, 1975) といった類似する表現スタイルも論じられているように、本研究における「間接的表現」が攻撃的表現に起因するもの

Table 2 変数間の相関分析の結果

	シャイネス	攻撃性	アサーション
間接的表現	.44***	.22**	-.44***
アサーティブ表現	-.18*	-.25**	.38***
非主張的表現	.28***	.15*	-.29***
攻撃的表現	-.28***	.22**	.31***

注. 仮説に沿う結果を太字で記す。

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

か、単なる表現の間接性に起因するものか、「間接的表現」の位置づけについてさらなる追試の必要があるだろう。妥当性の検討において、その他の関連はおおよそ予測通りの関連が認められており、尺度の妥当性の一端を確認することができたと考える。

以上のように、本研究では自己表現尺度の信頼性と妥当性を確認することができた。本尺度を用いることで明らかとなる個人の自己表現の傾向は、長期的な精神的健康や対人関係のあり方を予測することにもつながるだろう。しかし、本研究の取り組みはサンプルサイズの小ささからも限定的な検討であった。今後の課題として、再検査による尺度の時間的安定性の確認に加え、他者評定、および実験場面でみられる自己表現といった外的な変数との関連などから基準関連妥当性を検討するなど、さらなる研究の蓄積が求められる。

引用文献

- 相川 満 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- Alberti, A. E., & Emmons, M. L. (2001). *Your perfect right: Assertiveness and equality in your life and relationships* (8th ed.). San Luis Obispo, CA: Impact Publishers.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- 安藤有美 (2009). 大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連 カウンセリング研究, 42, 50-59.
- Deluty, R. H. (1979). Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.
- Galassi, J. P., & Galassi, M. D. (1975). Relationship between assertiveness and aggressiveness. *Psychological Report*, 36, 352-354.
- 平木典子 (1993). アサーショントレーニング——さわやかな〈自己表現〉のために——日本・精神技術研究所
- Phelps, S., & Austin, N. (1975). *The assertive woman*. Atascadero, CA, US: Impact Publishers.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, 50, 221-232.
- 2019.4.21.受稿. 2019.10.18.受理—

A Study on the Reliability and Validity of a Scale to Measure Self-Expression

Yumi UCHIYAMA

Department of Pedology, Faculty of Human Life Science, Shikoku University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2020, Vol. 28 No. 3, 247-249

This study developed a scale for evaluating the self-expression styles of university students and then verified its reliability and validity. Participants were 186 university students who were asked to complete a questionnaire containing questions about self-expression, shyness, aggressiveness, and assertion. The factor analysis revealed a scale consisting of four factors: assertive, aggressive, submissive, and indirect. Internal consistency was found to be sufficient, and partial validity was confirmed. These results indicate that the scale is useful for measuring the tendencies of an individual's self-expression.

Key words: self-expression, reliability and validity, assertion, aggressiveness